
月の昇る場所

華瑞季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の昇る場所

【Nコード】

N5221U

【作者名】

華瑞季

【あらすじ】

アラサー女子が、何故かMMORPG世界にトリップ。外見とステータス・スキルはアバターのおかげで超完璧 だけど中身は所詮アラサーな喪女。なるようになるさで異世界ライフが始まります。

昔、某MMORPGのとあるスレに投下したことがある文章を再構築しています。

ブローグ

いつものように、十九時過ぎに帰宅。

誰かが待っているわけでも、ペットがいるわけでもない。
必要最低限のものしか無い何も無い部屋。

仕事はさえない会社のしがない事務職。

毎日、帳簿とパソコンの画面を見つめる日々。
残業が無いのはいいけれど、給料も安くて泣ける。

鞆を放り投げて、化粧も落とさずにベッドに倒れこむ。

そんな私は、ここのえかつき九重香月二十九歳の独身女。
アラサー、彼氏なしの一人暮らし。

……そこ、なんか哀れみの目で見るな。

コレでも、日々楽しく暮らしているのだから。

ついでにノートパソコンの電源を入れて、MMORPG——ライ
ジングムーン——を起動させた。

恋人にふられてから時間だけは持て余していた私は、暇つぶしに

なれば……とたまたま、オープンβが始まったこのゲームに興味を持った。

……今考えれば、オンラインゲームでは無くてオフラインのゲームをすれば良かったのかもしれない。

ライジンググムーンは、種族、性別、職業、初期ステータスだけでなく、いわゆるアバターの部分の数値設定箇所が1000箇所以上という、詳細キャラメイクをすると六時間はかかると言われるとんでもないこだわりなのだ。

現在は追加種族も出てきたので、その外見パラメータの数値の組み合わせは途方も無い。

一応、デフォルト設定もあるのだが、そういうキャラはステータスの伸び代が悪く、いずれ消して作り直される運命になるため、本当の初心者でもないかぎり作らない。

本当によくぞ、こんな面倒なプログラムを組んだものだと思う。

そんなわけで、ゲーム内では同じ顔をしたプレイヤーは、ほぼいない。

いるとしたら2PC用のキャラくらいだ。

もちろん、似かよった数値なら、似た顔にはなるけれど厳密には

違うのだし。

βテストが終わり正式サービスが始まって四年。

今では、通常のアカウント確保用の課金だけではなく、便利アイテムと呼ばれる課金能力アイテム、毎月販売される限定ガチャ、季節ごとに出るパッケージ製品（もちろん限定アバターアイテム付）まで買っている。

もちろん、レベルもステータスもコストさせた。
装備も高額で高性能な稀少価値のある装備で固めてある。
入っているギルドもギルド戦争では上位クラスと言われるところ。

……とはいえ、神器とまで呼ばれるようなサーバーに数個しか存在しないレアアイテムを持てるような超廃人クラスまでやりこんでいるわけではないし、あくまでも趣味でやっている範囲だと私は思っている。

ゲーム内の私は退魔型の^{ホワイトスベル}白魔導師。

白魔導師は、回復や防御・身体強化系の魔法の使い手。
そのため、他の職からは支援職として重宝される。

退魔型でも、もちろん回復や防御・身体強化系の魔法は使える。
むしろ退魔型のほうがその効果だって高い。

そして、アンデッドや悪魔・魔神に対して絶大な威力を持つ魔法すら使える。

この魔法を使えることが、まず退魔型になる第一歩なのだ。

しかし、退魔型はマイナーというか大器晩成で使いにくい趣味職と言われる。

その理由は、退魔型にするためには魔力特化かつ詠唱速度特化の二極特化のステータスにしなければならないこと。

しかもその真価が出るのは無詠唱ができるようになるレベルカンスト付近。

私が退魔型を選んだ理由は、ソロで好きなときに狩りに行けるためだった。

回復も身体強化出来るし、お金がその分からない。

退魔型の狩場はほぼ固定されていて、同種の趣味人くらいしかないから空いている。

行ける場所は確かに限られるが、わざわざパーティを探す必要はないし、別の場所に行きたければパーティに混じることもできる。

ただし、強力な魔力と詠唱速度のかわりに、自身の耐久力を犠牲にしているからどうしても一般的な支援型に劣る。

一般的な支援型の白魔導師は特化ステータスにはしない。

多少ステータスに難があっても問題が特になかったりする。

無詠唱である必要性もないし、多少レベルをあげれば必要なスキルもステータスもほぼ揃ってしまう。

だから、2PCと呼ばれる別パソコンで起動して狩場で、支援スキルや回復スキルをメインキャラに使う放置キャラに白魔導師はよく見かけるくらいだ。

そう。

つまり、お手軽支援が作れるのに、わざわざレベルカンストまで上げる意味が無い。

レベルカンストさせるくらいなら、何も体力が無くて脆い二極特化にする必要性がない。

その分、体力に振って耐久力を上げる方が何倍も役に立つのだ。支援職は死なないことが重要だから。

液晶画面内で、ゲーム内での私の分身であるアバターを選択して、Enterキーを押した。

その時、私は光りに包まれた。

1・はじめまして異世界

もしも、剣と魔法の異世界に飛ばされたら――。

普通なら、必死に元の世界に帰れるように頑張る……って言うのがセオリー。

大体、そういうものの主人公は家族や友達が好きで家族や友達のために家に帰りたいたいと考えるのだ。

私？

私は家族が嫌いだし、友達に未練もない。

それに、いわゆるゲーム好き・ゲームオタクと分類される人間で一般人とはまた思考が違う。

異世界なら異世界に馴染んで暮らす。
郷に入れば郷に従えだ。

別に元の世界に帰れなくてもいいじゃないか。

――たしかに、ずっとそう思っていたけれど。

いざ、その立場に自分になると、パニックになるということを私

は初めて知った……………。

「…………寝ちゃったみたいだな」

耳元で誰かの声がする。

「ほんと…………いつも話してると、途中で寝ちゃうわよねえ…………。
そんなに、睡眠不足なのかしら」
「物騒だし、放っとくわけにも行かないし…………困ったもんだ」

また別の二人の音がする。

「二人とも先に帰って良いよ。俺が責任持つて起きるまで待つし…
…まあ起きなかったら宿まで運ぶから」

あれ？

私は自分の部屋のベッドの上にいたはず。
なんでこんな声が聞こえるの？

目をゆっくりと開けると、自分を覗き込んでる端正な顔をした緑色の瞳と視線が合った。

私は彼の足を枕にして寝ていたのだ。

「えっ?!」

慌てて起きようとした私は、その緑色の瞳の持ち主の口のあたりに盛大に額をぶつけてしまった。

そして私は額を押えて、相手は口を押えて痛みをこらえる。

もう、痛いやら恥ずかしいやら……。

「あー、慌てて起き上がるからー。リーチェちゃん、おでこ大丈夫ー？」

燃えるような赤い髪と口紅が印象的な、耳が尖った超美人が私の額に手を触れる。

私よりも体温が低らしく、冷たい手がとても気持ちいい。

古代ローマ時代のトーガのような白いゆったりとした服を着て、胸元に銀の十字架のようなペンダントをしている。

ていうか、リーチェって誰……？

「位置的に歯にあたったか？ あと残らないといいが……女は顔が生命だからなあ……」

私の額に手を当てている美人の隣には、漆黒と表現するのがぴったりの鎧を身につけた黒髪の男性が居る。

「……お前ら……俺への心配は一つも無しかあつっ」

私が額をぶつけた人が口を手で押えながら、無視している二人に怒鳴り声を上げる。

胸部分がはだけていて、さっきの超美人と同じペンダントを首から下げていた。

表が濃い赤で裏地が黒のカトリックの司教のような服だ。

「ソル、お前は頑丈だからいいんだよ」

「そうよ、リーチェちゃんはあるみたいには、体力無いんだからね」

周囲に目をやると、中世ヨーロッパ風の建物が目前に広がり足元には石畳がしきつめられて、空は高く澄みわたり、間違いなく屋外。

どっだ、ここ……。

あまりのことに、思考を停止してぼーっとしていると頬に冷たい物を当てられた。

「ひゃうつつ!？」

な、何が起きた!？

「…………ほら、氷。額冷やしとけ」

膝枕していただいていた司教のような人からポリ袋のような透明な袋に氷が入った物を渡された。
すぐ近くの露店から買ってきたらしい。

「あ、ありがとうございます……」

ありがたく頂いてまだジンジンする額を冷やしながら、少し状況を整理してみる。

自分の着ている服はチャイナドレスのような服だった。

黒地に銀の刺繍が施されて、動きやすいようにウエスト近くまでスリットが深く入っており、ガーターベルトの脚と皮のブーツが恥ずかしくて自分でもくらくらししてしまう。

顔にかかるように見え隠れしている腰まであるさらさらの長い銀色の髪。

私は、こんなに長い髪ではなかったし、第一こんなに綺麗な銀色ではない。

仕事柄、黒髪……とまでは行かないけれど、落ち着いた栗色に染めたセミロングだ。

そこまで考えて、ふと思いつく。

——この、服装って……見覚えがある。

……ライジンググーンの自分のキャラだ……！！

リーチエって、リーチエイル自分のキャラの愛称だ……！！

リアルだと恥ずかしくて着れないからと、ゲーム内の自分には着てみたかった服を着せていた。

このスリットのあるチャイナ服のような法衣は知人に頼んで作って貰った特注品。

指に付けたリングも特注品の魔法発動体。

……ということは。

ここはライジングムーンの世界で、私は「リーチェ」になってしまっているらしい。

たぶん、この超美人は……おそらく友人の黒魔導師^{ブラックスベル}のカタリナさん。

隣の黒尽くめは外見から判断して、カタリナさんの旦那さまのブラックさん^{ブラックナイト}（黒騎士）だろう。

そして、この多大な迷惑をかけてしまった司教はおそらく……

「その居眠り癖と慌て者な所を直してくれよな。さすがに狩場でやられたら放置するぞ」

「あら、そんなこと言って。いつも宿屋にきちーんと運んであげてるのは誰かしら」

そう、ソルトさん。

2・中身は残念です

「ねえ。

リーチエちゃん。本当に大丈夫？

さつきから、変なコト聞いてくるし……いつもより喋らないし」

「え……あ、はい。だ、大丈夫ですよ？」

「頭打って変になってないわよね？ 打ちどころ悪いとか……やっぱり治癒キユア掛けておいた方がいいんじゃない？」

打ち所以前の問題です。

だって、私はたぶん貴女の知っているリーチエじゃありません。

……と、言えたらどんなにいいだろう。

あいにく私は物事をキツパリ言い切って、トラブルおこしてもどうにかするという素晴らしい主人公補正というものは持ち合わせていないので曖昧に笑う。

「とりあえず、今日の所は早めに宿に帰った方がいいな」

ブラックさんが、カタリナさんの声を遮った。

さっきも話題に出てた気がするけど……宿……宿なのか。
家じゃないのか。

それよりも、何処に泊まってるんだ私。

「……ソル、送ってあげて？ リーチェちゃん、やっぱり調子悪そう」

ブツブツと思わず自問自答していたのを「調子が悪いせい」と力
タリナさんは判断したようだ。

「しかたないな。ほら、行くぞ」

「あ……え、は……はい」

右の二の腕を引っ張るように立たせられて、まさに引きずるとい
う表現が正しい状態で私は彼に連れて行かれた。

ソルトさんは、私と同じ白魔導師だ。

確か、種族は私と同じ人間だったと思う。

金色の髪と緑の瞳で、とても整った顔をしている。

中の人……プレイヤーが、パラメータをいじるのが得意だったのか、凝り性だったのか。

とにかく、細めのイケメンを作るのが難しい——ガツチリしたガタイの良いイケメンは比較的作りやすい——このゲームでよくそこまできれいな顔を作れたと思う。

私と違って彼は、追加スキルで近接戦もできる壁型の白魔導師。

一番近いイメージは、魔法も使えて武器の扱いも可能な、いわゆる神官戦士とか魔法剣士だろうか？

もちろん、そのステータスから、無詠唱はできないし魔力もさほど高くはない。

そのかわり、普通の白魔導師が装備できない重い装備も扱える。

私とカタリナさん、ブラックさんは同じギルドにいた。

ソルトさんは、別のギルドだったけど仲が良くて、私を含めた四人パーティでクエストをこなしたり、今みたいに雑談したりとよくお世話になっていた。

余談だけど、ブラックさんの職の黒騎士は魔法が一切使えない。そして、近接戦闘用の剣か槍のスキルが多いのでそれを専門に伸ばす人が多い。

カタリナさんの職の黒魔導師は、攻撃・弱体化の魔法に長けた職業だ。

彼女の見た目は白でまとめていて、種族がエルフなため（女性エルフは白魔導師を選ぶ人がほとんどだった）、白魔導師とよく間違われていた。

だからパーティを組んでいると遠距離火力がない変則パーティだと思われていたらしい。

実際は、彼女の持つ範囲攻撃魔法は恐ろしい威力なので、王道といえど王道のパーティなのだ。

「三階の角部屋がお前の部屋だよ。その隣が俺だから、何かあったら言えよ?」

どう歩いてきたのか、覚えていないけれど街の中程にある宿屋に私は連れてこられた。

思わず私は、その外観を見上げる。

白い壁とオレンジの煉瓦で作られた重厚な建築物。

海外旅行で行った、南フランス周辺の建築物を思い浮かばせるようなものだ。

そう言えば、石畳とか道の作りもそれに近いかもしれない。

一階は、酒場になっていて客室は二階以降。

ゲーム内にも、泊まることでHPとMPを全回復させてくれる「ヒットポイントとマジックポイント宿屋」があった。

しかし、その価格はかなり高めで、「宿狩り」——宿を利用してMPを回復させつつクエストや狩りをする——ことは、まさにお金で経験値を買うという意味があったが……

代金は前払いだった。

ということは、ここでも払わないといけないのだろうか？

「あ、あのっ 宿代って……」

「あれ？ 昨日、二週間分前払いしてたのに忘れたのか」

不安になって、ソルさんに声をかけると、不思議そうにそう返された。

二週間分、前払いされているなら、当分は大丈夫そうだ。
その後のことは、またあとで考えよう。

ちょっと足音が気になる木の階段を登り、客室に向かう。
部屋の前について、ペコリと私は頭を下げた。

「ソルトさん、ありがとうございます」

「気にすんなよ。じゃあ、またな」

軽く手を上げて微笑むと、ソルトさんはそのまま階下に戻っていた。

扉を開けると小じんまりとした部屋で、奥にベッド、窓辺に小さな机と椅子、そして大きめの姿見の鏡があった。

鏡……。

ということは、やっと自分の姿が確認できる……？

恐る恐る、鏡に近寄ると覗き込んだ。

銀色の長い髪と、まつげが長くて潤んだ薄い紫色の瞳。

白い肌は陶器のようになめらかで、細い首筋と華奢な手首は力を込めると折れてしまいそうだ。

そこにいたのは、完璧な美しさの少女だった。

「これが……リーチエ……」

背の高さは、本来の自分のものと変わらないから目線に違和感はない。

しかし、他は違和感だらけだ。

設定年齢は確か十八歳だったつけ。

見目麗しい美少女で十八歳という若さのリーチエ。

十人並みの見た目で二十九歳の自分。

どちらも確かに自分だったけど……

こんなにきれいな子だったとは思わなかった。

でも、ごめんなさい。

中身は二十九歳のアラサーオタク女です……。

多分、私とあの三人との付き合い方は以前と変わっていないのだ
ろう。ゲームの中

帰れるか帰れないかわからないのならば、このままココでリーチ
エとして暮らすしか無い。

きっと、なんとななる。

まあ、ライジンググーンの知識はほぼ完璧だし、きっと問題はな
いだろう。

うん、きっと。

3・自分の立場

目の前の空間に広がる退魔の魔方陣。

その魔方陣につかまり、まばゆい浄化の光に身を焦がされている
ヒトならざるモノ。

断末魔なのか恨み言なのか、何か甲高い声で叫んでいるが私には
あいにくと理解することはできない。

やがて、魔方陣の媒体としていた、白いおはじきくらいの大きさ
のムーンストーンが私の手の中で碎け散る。

それと同時に魔方陣の光は消えて、静寂が戻ってきた。

「おお、さすがですね。

無詠唱でその陣を展開するとは……間違いなく、リーチエイル様
ですね」

ヒトならざるモノをけしかけてきたその黒いローブの男は、楽し
そうにそう言った。

私は思わず溜息をつく。

「いくらなんでも、いきなりはないと思います。

もし、私が倒せなかったらどうするつもりだったんですか？」

「倒せる力量のものしか選んでいませんよ。

それにもし倒せないのでしたら、貴方は偽物というわけですね
え」

やはり楽しくて仕方ないという声色。

終わったことに少しほっとして、そもそもこんなことになっている原因を思い出す。

数日経って、なんとか状況が飲み込めて来た私は、ここはライジ

ングムーンの世界ではあるけれどMMORPGそのものの世界ではないと結論づけた。

その理由の一つとして、ギルド戦争という概念がここにはないこと。

ギルドというグループ単位がないのだ。

いや、ギルドは確かにあるのだが、それは文字通りのギルド。
例えば商人ギルドや魔導師ギルド、冒険者ギルドとかで……。

要するに、ゲームによってはクランとかリンクシエル、ホームなどといわれるギルドが無いらしい。

カタリナさんたちに話を振っても前述の通りで、ギルド戦争ナニソレ？ だったのである。

……カタリナさんとブラックさんを切込隊長にした少数精鋭で敵ギルドの砦を守りが手薄のところを狙って片っ端から落としていたのになあ。

無詠唱の隕石乱舞や晶石爆砕メテオストーム クリスタルデストラクションギルド戦争での華だったのに。

（余談だけど、どっちも本来だと詠唱がとんでもなく長くて、無詠唱になるのは素晴らしい廃レベルの特別装備とステータスが必要だったりするので、普通にレベルカンストしたくらいじゃできないのだけれど）

もうひとつの理由が、プレイヤー目線で確認できていた取得スキ

ルの確認とか、アイテム欄が開けないとか……

まあ、要するに、ここは現実だということなのだ。

NPCだと思っていた相手も、キャラクターもそれぞれの意思を持って生活しているわけで。

とにかく、自分の生活をまず何とかしないとイケないのだ。

そう分かってからの私の行動はそこそこ速かったと思う。

まずは、自分がどういう立場なのか見極める。

今滞在している街……ロテラは、奥の高台には貴族たちの住居がある地区や王城がある立派な首都らしい。

ゲーム内知識で説明すると、この世界にある3つある大きな大陸の一つ、ミカエル大陸の中央付近に位置するガルド王国。

魔法の研究が盛んで、付近の主要な村や街にも転送陣が完備されているから、そのために外に出てもさほど強い敵はいない。

だから、初歩的な魔法すら使えない低レベルの時にはちょうどいい。

もちろん、山奥やあまり人が立ち入らないところにまで足を伸ばすとそこには魔物や獣が闊歩しているけれど。

ここは私が最初にゲーム内に出てチュートリアルクエストを受けたところだ。

最初に選んだ職業で、チュートリアルクエストは受ける国と街が違う。

魔法系はココだけど、戦士系や盗賊系は別なのだ。

転送陣のおかげで、交通の便がとても良くて、この都市を拠点にする人が多かった。

露店も街の中の大通りにひしめき合っていたっけ。

幸いなことに、この知識は現状とさほど変わらないらしい。
魔法の研究が盛んなところ＝魔導師ギルドの本拠地があるところに変わったただけだ。

そして、私は、冒険者ギルドと魔導師ギルドの両方に所属しているようだった。

魔導師ギルドメンバーの証は、首からかけていた十字架のようなペンダント。

どおりでカタリナさんもソルトさんも同じ物を付けていると思った。

（私も実はしていたようで、インナーの上に付けていてアウターに出していなかったの、最初気がつかなかったのだ）

見た目は、ただの銀色の十字架。
多分、魔法がなにか込められているのだと思うけれど今の自分じゃさっぱりわからない。

冒険者ギルドメンバーの証は、やや細長い小さな金属プレートだった。

見た目だけだと、ベルトバックルの飾りとか、ペンダントトップにしか見えない。

大きさもそれくらいで小さいし。

チエーンや革紐などで首から認識タグのように下げる人もいれば、リーチエイル私のようにベルトバックルの内側など目立たない場所に付けている人も多いらしい。

……着替える際に発見して、最初はなんだかさっぱりわからなかったのは秘密だ。

自分のプレートには名前：リーチエイル 職業：白魔導師ホワイトスベル 種族：人間 冒険者ランク：SSS こう書かれていた。

冒険者ランクは、おそらく元のゲームのレベルに相当するのではないかと思う。

SSSは冒険者ランクで最高のランク。このランクを持っているのは、わずかな冒険者だけらしい。

ごく僅かなSSSの冒険者の魔導師。

それが今の自分らしい。

……………。

どんだけこの子ハイスペック!?

見た目も完璧、ステータスも完璧。

たぶん、カタリナさんやブラックさん、ソルトさんもSSSなんだろうと思う。

理由は、私とレベルが同じだったはずだから。

……違ったら、それはそれできつとこの世界に自分を放り込んだ

なものかが、自分をチート生物にしたんだと思うことにする。

とりあえず、ギルドに所属しているのであれば、そこから仕事がもらえるのかもしれない。

それに「自分の立場」を知るにはいい場所だろう。

そう考えた私は、魔導師ギルドにまず向かった。

それが冒頭の出来事の原因となるとも知らずに。

4・迷惑な誰かさん

魔導師ギルドの場所は、私の記憶ではターミナルと呼ばれる各街への転送陣の集合する場所だった。

魔導師ギルドの場所を知っていたのか？　と言われそうだが、知っていたわけではない。

リーチエの荷物からこの街の地図が出てきたので、それを参考にした。

自分はライジングムーンの世界の全ての国のMAPはほぼ覚えている。

始めたときから、歩いてマッピングして簡易地図を作り、モンスターの種類やダンジョンの構造、街ごとの特産品などの情報サイトを開いていたくらいなのだ。

（余談ではあるけれど、情報サイトとしては老舗としてかなり有名だったのは自慢だったりする）

もちろん、どの街にどんな施設があって、どんなクエストがあるかなども詳細に調べていた。

それが役に立ったのがとても嬉しい。

ゲーム内でのターミナルは、転送陣とそれを説明するNPCのメイドさんだけが存在していた。

それに変わって、魔導師ギルドは大きな建築物だった。

四つの塔がそびえるその姿は、スペインのバルセロナにあるサクラダ・ファミリアの姿に似ていた。

象徴詩的な像と、放物線状の構造のアーチ、鐘楼に据えられた彫刻……。

全てがよく似ている。

多分、大きさ自体はかなり小さくなっているとは思っけど。

中に入ると、入口近くに受付らしいカウンターがあった。

だいたい、受付近くに仕事の依頼の書かれた紙が掲示板に貼ってあったりするものだとは私は思っていたけれど、ここにはないようだ。

魔導師ギルドじゃなくて……冒険者ギルドに行かないと無いのかなあ？

魔法関係の依頼とかは、こっちだと思ったんだけど……。

そんなことを思いながらあちこちをきよろきよろと見廻す。

魔導師らしい人たちが何人も忙しそうに奥に行ったり、入ってきたり。

壁際でこちらを見てヒソヒソと話している集団も居る。

自分のことを話されているのはわかるけれど、何を話しているのかまではわからないし……

さすがに知りたくもない。

「魔導師ギルドへようこそ。どのようなご用件ですか？」

あまりにオノボリサンな行動だったのだろう。

受付？の綺麗な金髪をまとめ髪にして銀縁のメガネをつけたお姉さんに声をかけられた。

「あ、えーと……いや……あの、ここって何があるんですか？」

とつさに、ほかにになにか言葉は出なかったのかと自分に言いたい。なんて不審人物なセリフだ。

「はい？」

あ……ああ。魔石の種類ですか。

ちょうど入荷したばかりですので、全種類ございますよ。どれをお求めですか？」

……お姉さんは勝手に勘違いしてくれたようだ。

魔石というのは、魔導師が自分への負荷の高い高威力の魔法を使用する際に代わりに負荷を肩代わりさせる石のことだ。

もちろん、魔石がなくてもその魔法は使えるけれど消費魔力は凄まじい。

低レベルのうちは、魔石がなければ魔力がすぐ底をついてしまうし、高レベルになってからも高威力の魔法を乱発するためには必要になる。

魔石の名前は、現実世界の石の名前が付いている。

ムーンストーン、ローズクォーツ、ルチルクォーツ、クリスタル……等。

多分、現実のものと同じもの。

大きさは手の親指の爪くらい。おはじきサイズだ。

それぞれ使う魔法によって、媒体は違う。

「あ……え、えーと

ムーンストーンとクリスタル。

それから、ローズクォーツもありますか？」

ムーンストーンは、自分が得意とする退魔用の魔法のために必要だ。

クリスタルは治癒魔法、ローズクォーツは身体強化魔法用だ。

ちなみに、ライジング”ムーン”というだけあって、ゲーム内ではムーンストーンが一番魔石としての汎用頻度は高かった。

ゲーム内で購入するときは、街の道具屋でどこでも売っていたはずなんだけど、どうやら魔導師ギルドでしか魔石は扱ってないような気がする。

そういえば、街中探検をここ数日敢行したけれど道具屋に魔石の入った袋とか置いてなかったな……。

「数はおいくつでしょうか？」

「10個からの販売となっております」

「おいくらになりますか？」

「どの石も10個銀貨60枚になります」

「じゃあ、50個つつ下さい」

「合計で金貨9枚になりますね」

銅貨100枚⇨銀貨1枚。

銀貨60枚⇨宿代10日分。

銀貨100枚⇨金貨1枚。

……そう考えると、この金額のお金を払うのはいかななものかと

ちよつとだけ思ってしまったのは秘密。

今さらだけど、魔導師ってお金かかるんだなあ……

お姉さんから、魔石がそれぞれ入った袋を手渡される。

とっさに出せるようにベルトポーチに私はそれを入れた。

「やあ、リーチェイル様じゃないですか」

背後から様付けで声をかけられて、慌てて私は振り向いた。

黒いフードを目深に被り、渦を巻くような妙な形をした杖を右手に持った男がそこにいた。

「……えーと、どちらさまですか……？」

こんな不審人物、知り合いだと思いたくない。

「やだなあ、僕のこと忘れたんですか？」

口元がニヤリと歪んで、男は後ろに少し下がると左手をかざした。右手に持った杖の渦から、黒く不気味なヒトならざるモノが現れて私に襲いかかってくる。

これは、レイスだ！

咄嗟に先程買ったばかりのムーンストーンを一つ掴み、魔方陣を貼る。

魔法の使い方などわからないと思っていたけれど、身体自体がそれは覚えているらしい。

目の前の空間に広がる退魔の魔方陣。

その魔方陣につかまり、まばゆい浄化の光に身を焦がされているヒトならざるモノ。

断末魔なのか恨み言なのか、何か甲高い声で叫んでいるが私にはあいにくと理解することはできない。

やがて、魔方陣の媒体としていた、白いおはじきくらいの大きさのムーンストーンが私の手の中で砕け散る。

それと同時に魔方陣の光は消えて、静寂が戻ってきた。

「おお、さすがですね。

無詠唱でその陣を展開するとは……間違いなく、リーチエイル様ですね」

ヒトならざるモノをけしかけてきたその黒いローブの男は、楽しそうにそう言った。

私は思わず溜息をつく。

「いくらなんでも、いきなりはないと思います。
もし、私が倒せなかったらどうするつもりだったんですか？」

「倒せる力量のものしか選んでいませんよ。
それにもし倒せないのでしたら、貴方は偽物というわけですね」

やはり楽しくて仕方ないという声色。

……そして、コレが冒頭に繋がるわけで。

ていうか、魔導師ギルド。

屋内で魔法使えないようにするとかしとけよ……

こんなバカ魔導師みたいな他にも居るんだろ……

この黒いローブの男は、たぶん不死魔導師か闇魔導師だ。
ネクロマンサー ダークスベル

どっちもアンデッドモンスターを使役できる。

不死魔導師はかなり高レベルのモンスターも支配下におけるけれど、闇魔導師は低レベルのものだけ。

根本的違いは、不死魔導師は不死系以外の魔法は使えないことと、闇魔導師は黒魔導師の魔法の一部を使用できること。

レイス自体はレベルはさほど高くないから、ある程度使用者自身のレベルがあれば使役できるはず。

……どっちにしても、ゲーム内の知り合いでこんな人はいなかった。

とすると、ここでのリーチエの知り合いだろうか。

知人を作るにしても人を選ぶ、リーチエ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5221u/>

月の昇る場所

2011年10月9日10時15分発行